

平成30年2月10日

(2018年)

平成28年度吹田市立博物館事業評価報告書

吹田市立博物館協議会

委員長 一瀬 和夫

吹田市立博物館の平成28年度事業評価について吹田市立博物館協議会では平成29年5月19日および平成29年10月20日の協議会において慎重に審議した。以下に吹田市立博物館がめざす活動目標に沿って、その結果について報告する。

1 展示 総合評価点 7.52点 (詳細は別表平成28年度事業評価点 (1-①～②)を参照)

(1) 常設展示

常設展示は通史展示である第1展示室と古代窯業をテーマとした第2展示室で構成されているが、開館以来、大きな変革はなされていない。常設展示のリニューアルは、大きな課題であろう。これまでの「さわる展示」の成果を取り入れ、「さわるコーナー」として常設化してはいるが、展示全体の中でどれほど機能しているか今一度検討する必要があるだろう。常設展示は、いつでも誰でも地域の歴史学習の場として利用できることが求められるが、外国語への対応、子ども向けの解説、収蔵の目処がついた西村公朝作品の展示など優先的に取り組み、地域住民以外も視野に入れたリニューアル案を構築すべきであろう。魅力ある常設展示であれば、常設展示を目的とした来館者の増加も期待される。

(2) 企画展示

企画展示に関しては、5年間の中期計画が示され、多彩なテーマの企画を実践していることは評価できる。千里ニュータウンや大阪万博、吹田ゆかりの歴史的事象を扱ったテーマは館の個性として重要である。しかし、それらの企画が市民ニーズと合致しているのか、そうした検証も必要ではあろう。

平成28年度は北大阪ミュージアム・ネットワークとしての連携展示が行われなかったが、中核館としてネットワークをリードしていくような企画展を推進してもらいたい。また、地域の諸施設への出前展示は、普段は博物館にこない層に対してのPR効果も望め、地域博物館としての存在意義を高めることに繋がっていくであろう。

①春季特別展『“田園都市”千里山～大正時代の理想郷～』(4月25日～6月7日)

春季特別展「“田園都市”千里山～大正時代の理想郷～」はとても面白い展覧会であって、海外も視野に近代都市から大阪万博に至るダイナミズムを考える上でも、今後発展させて展開していくテーマである。総入館

者数は4,121名を数え、観覧者の満足度も高かった。展示の成功例といえるだろう。1920年代に開発された千里山住宅地の実態を、イギリスのハワードが提唱した田園都市論や日本における田園都市実現の歴史と関わらせつつ示したもので、学術的レベルも高かった。この種の展示は、観覧者の「郷愁」に頼りすぎるという危険性を常に伴うものであるが（もちろん、展示において「郷愁」に訴えること自体は否定されるべきものではなく、妥当なものであるが）、今回は千里山住宅地誕生の背景がよく理解できるものとなっていた。関連イベントも充実しており、それらとの相乗効果により、千里山住宅地についての理解がより深まったことと思われる。

ただ、今回の展示の基本的視角は、開発の主体と、新しく誕生した町およびその住民に限定されており、田園都市として住宅地が開発されるまで、千里山とはどのような地域であったのか、古くからこの地に住む人々（具体的には近世の佐井寺村段階以来の地域住民ということになる。）は住宅地開発をどのように受け入れたのか、そこに矛盾が生じることはなかったのかといった視点は弱かったように思われる。史料的な問題もあり、困難であるかもしれないが、「地域社会」に焦点を当てた展示には、このような視点も必要である。

また、イギリス・レッチワースの歴史や現状紹介も欲しかった。将来的に吹田市とレッチワースとの国際都市交流が、博物館ボランティア市民活動といった中味で展開するという流れの夢のある芽づくり提案もあればよかった。

②企画展示「魅せる！青と緑—浪華の文人画家・金子雪操—」・同時開催 さわる月間

（6月18日～7月10日）

郷土ゆかりの金子雪操を取り上げたことは、大坂画壇のみならず、オーソドックスな美術史研究にとっても資することであり、こうした企画を継続して開催していることは高く評価できる。ただ、そうした評価が社会的にも認知されていく必要があり、それは博物館だけではなく、市や郷土を愛する市民にとっても課題に思われる。

館の存在感を高めるために、企画展と関連した学会の研究会、支部例会などを開催することもあるかもしれない。

「さわる月間」は継続・更なる充実に期待したい。また、常設展を活用した「さわる展示」の深化等関連イベントの新展開をご検討いただきたい。配布資料・キャプションの点字表記に誤りが複数あった。点字資料の質の確保は、今後の課題である。

③夏季展示『まもる自然・つくる環境Ⅲ—どっちがどっち！？ちかくの自然をよくみてみよう—』

（7月16日～8月24日）

夏季展示は、公募市民による実行委員会によって展示や関連イベントの企画・展示・運営がなされている。多くの市民、自然系団体の参画、協力を得て実施されていることは評価できる。ただ、単年度募集の実行委員会では継続性や資料に蓄積に難しさを抱えているようであり、自然・環境展を継続していくのであれば、長期的な展示戦略を行えるような実行委員会のあり方も検討材料であろう。

28年度は総入館者数が5,773人、そのうち展示室に入った観覧者は1,965人であった。来館者は前年度の3,074人を大きく上回ったが、展示室へ入った人の割合は3割強である。イベント頼みの集客ではなく、展示室へいかに導くかが課題である。展示を観たアンケートによれば、展示室内の工作或遊びが楽しかったという意見が多い。夏季展示に限ったことではないが、観覧者を呼び込む工夫も欠かせない。

「しぜん発見シート」は、27年度より応募者数も増え、学校側からも取り組みやすいとの評価を得ており、今後も継続して行って欲しい。コメントを付して掲示するだけでなく、調査成果を展示内容に活かす工夫もあればいい。展示期間が夏休み中ということもあり、学校行事としての来館は難しいであろうが、理科のカリキュラムとの関わりを持たせ、アンケートで引き出した子どもの興味を組み合わせれば、学校としても夏季展示を学校行事として活用しやすくなるのではないか。

④秋季特別展『古代の港か？祭場か？—五反島遺跡の謎に迫る—』（10月8日～12月4日）

五反島遺跡を広く市民に周知し、地域への愛着を持ってもらうという目的のひとつは、アンケートに記載されているようにある程度の達成度はあったと思われる。また、須恵器大甕の露出展示は間近で見て触れることに好評ではあったようである。

展示内容としては、五反島遺跡を単独で扱ったため、速報展の感じが拭えない。地域の中で占める遺跡の位置づけが不明瞭になってしまった。同時代の淀川沿いの他の港湾遺跡との関わりを示す資料があれば良かった。

⑤特別企画「むかしのくらしと学校」（12月13日～4月2日）

小学校3年生の学習内容との連携展示である「むかしのくらしと学校」では、教員との連携をとりながら展示内容を毎年工夫し、カリキュラム等にも配慮している点については学校側からも高評価を受けている。さらに教員にアンケートを採り、その声を受けて展示内容の改善を図っていることが、何より子どもたちの高い満足度につながっている。その上、そのアンケートも、体験コーナーの感想、子どもの人気度、博物館からのコメントなど、とても丁寧なものであり、その結果を集約したものを全校の管理職、3年生の担任に送付されていることは、学校と博物館がこの展示に対する認識を共有するという上で大切である。

市内のほとんどの小学校が、見学なり出前授業なりで関わりを持っていることは、大いに評価できる。

2 市民参画 総合評価点 7.76点（詳細は別表平成28年度事業評価点（2-①～③）を参照）

（1）市民ニーズの把握

アンケートはただ採れば良いといのではなく、集約も数字の集計にとどまるのではなく、記述式で記載された内容を含めた分析が重要であろう。アンケートの様式、質問の仕方、項目の見直し検討、調査結果分析方法など改善、再検討を求めたい。現在は展覧会ごとのアンケートとなっているが、講演会や講座のニーズを把握するためにも、調査対象の事業の範囲を拡充することも検討すべきであろう。

(2) 市民との連携

市民と連携して事業を展開するという点においては、夏季展示の実行委員、特別企画のボランティアをはじめ、「さわる月間」の福祉団体、その他各展示会のイベントへのボランティアの参加など、充実した市民参加があり、多様な市民参画の場を提供していることは評価できる。今後もより多くの幅広い市民団体との連携、特に社会教育団体との連携が望まれる。

こうした活動を維持・継続していくためには、実行委員なりボランティアなりの活動の満足度を保つことが肝要であろう。そのための研修制度の確立は必要である。また、組織や制度として継続していくには世代交替をスムーズに行う長期的展望に立った人材育成も求められる。そうした意味では、本年度に実施した学芸員体験講座などは有効であろう。実際、受講者の中からボランティアとして参加されて方もおられる。また、現在市民参加されている少年少女を対象に博物館少年少女クラブといった若年層での組織づくりも長い目でみた市民参加の核づくりになると思う。

(3) ボランティア

ボランティアについては、かなり充実した、コンスタントな活動が展開されている。今後はこのレベルを維持するためにも活動メンバーの層の厚さを高めることが肝要と料する。

新人も含め、ボランティアに対する総合的な各種の研修は、ボランティアにとって活動の領域を拓けられるというメリットはもちろんのこと、ボランティア同士の活動刺激にも大いに繋がっていくと思われる。そのためにも中味の濃い充実した研修開催が望まれる。

また、ボランティアの意識調査も行ってみてはどうであろうか。博物館活動のなかにおいて展示やイベント以外にもボランティアに参加したいという人材の発掘にも効果があるであろう。

3 地域学習の拠点と連携 総合評価点 7.52点 (詳細は別表平成28年度事業評価点 (3-①~②) を参照)

(1) 地域学習の支援

「幅広い年齢層への催事の実施」に関しては、春季・秋季とも高齢層や若年層と小学生など個別年齢層を意識した特別展に取り組んでおり、また、視覚障がい者層にも目配りした企画展にその方たちが多く利用しているなど大いに評価できる。引き続き魅力的な催事を工夫・実施することを期待している。

「出前・依頼講座」については、開催回数・参加者数とも27年度に比べ増加に転じている。近年の高齢者の増加に伴い、講座内容に対する市民、特に高齢者の欲求は益々増加傾向にあるので、可能な限り市民文化センター・公民館等からの講師派遣要請に継続対応してあげて欲しい。

(2) 連携

「連携事業に関しては、旧西尾家住宅・旧中西家住宅と連携し、”すいたグルッと歴史めぐり”見学会等に共同参加し、また、北大阪ミュージアム・ネットワークについては、北大阪ミュージアムメッセやシンポジウムを開催するなど意欲的に連携事業を展開し、中核館として大きな役割を果たしている。

歴史街道推進協議会とは西国街道連携事業において地元歴史団体「吹田郷土史研究会」と共同で参画し、

「西国街道」関連の講演会及びそれに関する歴史ウォークを実施して、西国街道に繋がる吹田市内の街道沿いに存在する歴史的遺物・歴史的構造物を紹介するなど市民の文化意識向上に役立っている。

4 情報発信 総合評価点 6.85点 (詳細は別表平成28年度事業評価点(4-①~②)を参照)

(1) 広報の充実

ホームページは、展示や行事の内容、刊行物の案内、お知らせ記事や館長ページなど、その都度適切に更新がなされている。また見やすさ、わかりやすさの観点から、修正も加えられている。前年度比較でアクセス数は減少しているようであるが、博物館が発信するホームページとしては充実した内容と評価できる。

ホームページを通して、博物館活動、事業計画、事業評価などの公開と情報発信は十分にできており、従来からの媒体・手段に加えて、新たに吹田市公式 Facebook による情報発信を試みるなど、ソーシャルメディアを活用した広報にも積極的に取り組んだことは評価できる。

博物館だよりについては、年間4回の発行とかなり力を入れているように感じられる。その一方、どのくらいの人が手にしてくださっているのが気になるところでもある。立派な用紙を使っの「博物館だより」を少しイメージチェンジしてみてもいいかであろう。今のサイズを1/2 または1/4 のサイズにして持ち運びの良い大きさにしてみる。情報の載せ方を図鑑風にして、興味ある方は保存版の本のような感じにしてみる。表紙に英語表示と日本語表示をデザイン的にしてみて、若い方からも興味を持って手にしてもらえよう導く。冊子のどこかに明確にわかるアクセスを入れて、冊子を持ってきた来場者には入館料割引等のサービスを表示するなど、情報誌としての発行意義に再検討を加えてもいいのではないか。

(2) 博物館活動の公開

『博物館だより』・『博物館報』・ホームページにおいて、事業報告・研究成果・事業評価が公開されており、必要な情報公開が適切に行われている。

博物館情報の発信については、誰に向かって、何を発信していくのか、その目的を十分に把握、整理した上で行うべきである。年齢層の違いによっても、情報を得る手段には紙媒体、電子媒体など得意とする方法に差異がある。来館者アンケートによれば、高齢者ほど市報などが情報取得の手段として多い。市報を手にする機会のない市外の住民にどのように発信していくのか。ホームページ、Facebook による来館者の割合は伸びておらず、その効果を検証する必要があると感じる。

5 学校教育との連携 総合評価点 7.10点 (詳細は別表平成28年度事業評価点(5-①~②)を参照)

(1) 利用の促進

引き続き小中学校教諭を対象にした吹田の史跡見学(歴史探訪)を実施されたことは、地域史を授業に導入するという観点からも非常に高く評価できる。小学校では、地域史に関連づけやすいのは、3・4年生、あるいは6年生である。教育センターとの連携を強めていただき、10年研修の一環に加え、希望者の枠を追加す

るなど、より多くの教員に機会を与えていただければさらに有益であると考え。ただ、史跡巡りに終わらず、研修に参加した教員が博物館を授業で活用できるようなプログラムにも工夫が必要であろう。

また、「あかりの授業」「お米作り」などのメニューがある出前授業は、博物館から遠隔地にある学校にとってはとても好評である。連携を進め、さらに希望校が増えるように図っていただきたい。

(2) 学校教育への支援

小・中・高、各学校種との連携を進め、さらに学校種ごとのニーズに沿って取組を進めていこうとする姿勢は高く評価できる。

小学校3年生のカリキュラム連携展示（むかしのくらし）において、参加・体験型のプログラムを継続的に取り入れたことは高く評価できる。今後の更なる改善を期待したい。

中学校との連携で、第三中学校との意見交換により「吹田の歴史にふれてみよう（第三中学校版）」を作成し、中学生の夏期休業における利用促進を図れたのは大変良かったと考える。特に今後、中学校との連携を進めるに当たって、社会科教員に広く博物館を知ってもらい、生徒の利用を促進するために、「吹田市中学校教育研究会社会科部（学研社会科部）」に対する働きかけが有効ではないかと考える。同様に、教育センターとの共催による小中学校教員を対象とした吹田の史跡見学を行う歴史探訪バスツアーも有効な取組であるので、是非、継続実施されたい。

また、各中学校が取り組んでいる「職場体験学習」も体験した生徒や中学校教員にとって非常に有用であるので、生徒達にとって魅力ある職場であることをアピールするプログラム作成や発信方法を検討していただきたい。

高博連携として「吹田高校DAY」を実施し、美術部や軽音楽部、ダンス部などの文化系クラブの活動発表の場を提供したようだが、効果検証をしたうえで高博連携のあり方を検討していただきたい。高校生インターシップの取組は、市内5校の府立高校を中心に周知・広報の工夫を期待したい。

以上、様々な取り組みが、児童・生徒にとって魅力的な博物館であり、わがまち吹田を愛する郷土愛を育ていけるよう、学校教育との連携を推進していただきたい。

6 資料の収集と保管 **総合評価点 6.16点**（詳細は別表平成28年度事業評価点（6-①～③）を参照）

(1) 資料の収集

資料の収集については、収集方針に基づき重点収集資料では大阪画壇関連資料を中心に資料収集が進められた。また早田家文書など地域の歴史に関連する重要な史料の収集や寄託も着実に進められたことは評価できる。

(2) 収蔵資料の保管・管理

収蔵庫の増築については、西村公朝作品受入のための収蔵庫増設予算が確保され、平成29年度に増設工事が実施される見通しがついたことは、長期間の取り組みが結実したものとして評価できる。

資料の虫菌害対策では、平成28年度において収蔵庫燻蒸は実施されなかったが、館内の棲息有害虫・浮遊菌・カビに関するモニター調査が2回実施され、良好な状態が保たれていることが認められる。

(3) データベースとその公開

新規の収蔵資料の整理・登録は進んでおり、分野ごとのデジタル目録は個別には作成され、図書のデジタル化とホームページでの公開は進捗しているが、新規に収蔵された資料のデータベース化に遅れがみられる。図書館データベースとの連携の問題がベースにあるものの、博物館資料のデータベース化とその公開は、博物館の情報発信力を高めていくための基盤になるものであり、引き続き将来を見据えた検討が必要である。

7 調査研究 総合評価点 7.53点 (詳細は別表平成28年度事業評価点(7-①~②)を参照)

展示や講座の準備過程で必要な調査・研究が行われ、その成果が特別展図録、『吹田市立博物館だより』、『吹田市立博物館館報』、歴史講座などに適切に反映されている点は評価できる。

早田家文書、山田別所史料、原町(片山村)文書など、地域史料の収集・調査・整理を行ったことは評価できる。ただし、市内の旧家などに眠っている近世・近代史料を積極的・計画的に発掘・調査するという点ではまだまだ不十分といわざるを得ない。市域には、未発掘の近世・近代史料が大量に存在すると思われるが、今のうちに調査しておかねば、いずれ廃棄されたり散逸したりすることは目に見えている。現在、これら未発掘史料の収集・調査・整理・保存を行うことができるのは吹田市立博物館のみであり、館としてはその責任を積極的・計画的に果たす義務がある。

昨年度発足した館内の研究会である「学芸研究会」については、今年度2回の報告会を行ったとのことである。この種の研究会は、発足当初は活発に活動するものの、間もなく活動が低調になることが多いものであるが、活動を継続させていることは評価できる。

8 施設の整備・維持管理 総合評価点 5.33点 (詳細は別表平成28年度事業評価点(8-①~③)を参照)

施設については、管理とは別に経年劣化については、市の文化的拠点としてのポテンシャルを確保、維持していくために全市的問題として対応すべきかもしれない。

外国語施設案内表示については、グローバル化の流れの中でもかなり遅れていると言わざるを得ない。早急に対応すべき課題である。地域には複数の大学があり、今後も留学生や研究者の来館も多くみられるであろう。吹田の歴史・文化を学びたいという外国籍の方へ向けた情報発信も重要である。また、「さわる展示」に力を入れていくのであれば、館案内も含め、点字の表示も不可欠である。

アクセスについては、27年度の表示看板に引き続き、28年度、地域を取り巻いての横断幕作成、特に近隣の子どものためのアートによる作成というところは高く評価をつけたい。引き続き、JR 岸辺駅前案内表示板設置には、大いに期待したい。

博物館への直近のアクセスは、阪急バスしかないことを鑑み、例えば、バス停名「佐井寺北」の下部に「博物館口」と記してもらったらどうか。これにより市民は博物館への足も分かるし、その存在を知ること

にも繋がる。もちろん、このバス停からは博物館への分かりやすい案内板が必要である。これは市民ボランティアに依存することも可能である。

吹田サービスエリアからのアクセスロードは進展がみられないが、引き続き協議継続を望む。

9 社会貢献 総合評価点 8.20点 (詳細は別表平成28年度事業評価点(9-①~②)を参照)

博物館実習、JICA 研修、インターンシップなど人材育成における社会貢献は意義も大きく、受講者からの評価も高く、その役割は果たしているように思われる。

博物館は社会教育施設であり、その機能が十分果たされることが重要である。人材育成のほかにも、博物館という場が利用され、利用する個々の市民、市民団体、地域社会などがそれぞれの自己欲求を満足させ、自己成長させる機会を提供するという貢献もあろう。ひいてはそうしたことが、社会へ還元されていき、より豊かな文化を育てることに繋がっていくと思われる。博物館の担う社会貢献のあり方を積極的に示し、発信をしていってほしい。

*なお、活動目標ごとになされた総合評価点は学識経験者 6 名、学校教育関係者 2 名、社会教育関係者 3 名、市民公募委員 2 名からなる計 13 名の博物館協議会委員による事業計画ごとになされた 10 点満点の個別評価の平均点とした。